

## 令和元年度（2019年度）第1回産業・経済部会（第4回研究会）議事録

日 時：令和元年5月10日（金）10:00～12:15

場 所：北海道庁別館西棟4階7号会議室

出席者：坂下部会長、奥田委員、青木委員、板垣委員、市川委員、  
柿澤委員、小坂委員、小田委員、佐藤委員、韓委員、  
東山委員、満菌委員、宮澤委員

事務局：靄原室長、中谷主幹、伊藤主査

### 1 開 会

### 2 議 事

#### (1) 小田委員報告

「北海道総合開発計画の変遷～第3期計画（1972年）以降の開発概要と資料」

#### (2) 今後の予定について

#### (3) その他

### 3 閉 会

## 1 開 会

## 2 議 事

### (1) 「北海道総合開発計画の変遷～第3期計画（1972年）以降の開発概要と資料」

発表者：小田委員

#### 【小田委員】

- ・【資料1】（レジュメ）及び【資料2】（年表）により、前回の道史が扱っていない1972年以降の開発計画の変遷を中心に説明。
- ・資料については、【資料2】（年表）にゴシックで示した項目を中心に十数点ほどの資料を掲載する予定。

#### —各委員からの感想及び質疑—

#### 【坂下部会長】

- ・今回は1972年以降の話で、それ以前のことを知らない方もいると思うので、前の部分も解説してもらおうと思ったが、それ以前の時代の話は資料に書かれていて、開発庁・開発局の位置づけなど補足的な説明もあったので、少し理解できたかと思う。
- ・また、小田先生自身も開発論争の論客として活躍されていたことがあるので、相当詳しく、今日は全体のストーリーをお話いただいた。開発問題は、いろいろな産業との関わりがあるかと思うので、自分の専門領域からの質問をいただければと思う。

#### 【小田委員】

- ・新しい道史は北海道全体のことを中心に扱うので、例えば浦臼リゾートなど個別地域の問題をどう扱うのか。ここでは、特徴的なものとして浦臼の事例を挙げたが、当時は他にも似たような事例が沢山あった。新幹線ルートなどでも、本州の企業が「将来高くなるから」と言って土地を売るとか、現在でも「原野商法」の影響が残っていて大変なことになっている。

#### 【坂下部会長】

- ・あまり一般的な話ではわかりにくい。通史のほうになると思うが。資料編は、資料の説明のための解説という事になると思う。浦臼の資料を出すかということになると思うが。

#### 【韓委員】

- ・今の質問に関連するかもしれないが、全体の趣旨として、「光」の部分というのをどのように位置づけるのが、私にはよく分からない。全体として「光」と「影」の両方をまとめるというのはバランスが取れてよいと思うが、「影」の部分は「結果としてあまり上手くいかなくて失敗した」と考えればよいのか、というのが1点。
- ・それに関連して、失敗した計画や事件などが、そもそも北海道の開発の構造的な問題に関連しているとお考えなのか、あるいは日本の経済の全体的発展と関係があって、景気循環などもあるかと思うが、時代別の特徴として変わっていくものと捉えたほうがよいのか。あるいは前から地域住民との対立は結構あったというお話だったので、多分時代集中的なことではないのかなと思ったのだが、先生は資料をご覧になって、北海道ならではの問題が、時代を追っていくと違いが見えるということなのか、経済全体の関係で集中的に一つの時代で失敗したということなのか、もう少し「影」の中身を伺いたい。
- ・そういった意味で、全体の開発という考えで捉えた方がいいのか、地域別の具体的な事例をどう取り扱うかということも、もう少しイメージできるかと思う。

### 【小田委員】

- ・明らかにオイルショック前後まで、北海道の開発計画は国の計画に沿った形で進められてきたが、これは「光」だと思う。「影」の部分としては、この当時、北海道の基盤整備の開発が遅れていたこともあって、開発に対する道民の反対運動もあまり起こらず、総体的に受け入れていた。地域では「もっと開発を進めてほしい」ということで、開発期成会が各市町村につくられ、市町村長が国や開発庁へ陳情を盛んに行っている、といった時代。だからオイルショックの前までは、開発に反対するのは非国民、のようなイメージで捉えられていたと思う。
- ・ガラリと変わるのはオイルショック以降。私自身、反対運動の新しい形が北海道で生まれたと思ったのは、苫小牧の「公害垂れ流し」への反対運動だと思っている。全道的な規模の運動としてはこれが初めてで、労働組合・政党・一般市民、あらゆる階層が集まっていた。この後、各地域の具体的な事業でも、地域にとってまずいと思うものについては、地域で反対運動が起こってきている。
- ・ゆえに、前半部分は「光」で、大体国の方式を受け入れるという事が多かった。1970年代初めから中頃にはそれが大きく変わってきて、開発庁・道庁などは自分で決めたものを進めていこうとするけれども、それが地域にとってあまり良くない計画だということになれば反対運動が起きる。これが後々まで膠着状態で続き、いくつかの事業は進んでいかなかった。つまり、経済の変化と大きく関わっているといえる。そういう意味で、1970年代以降の「影」の部分は、国や道庁の言い分にも触れていかなければバランスを欠く。
- ・もう一点、「北海道ならではの動きなのか」という点。1970年代以前では、国の計画に逆らうという事例は全国的にも少なかったかと思うが、特に北海道では国・開発庁の計画を積極的に受け入れてきた。
- ・1970年代以降でも「光」と「影」の部分が出てくるが、これも北海道ならではの場合が多い。北海道開発局と住民との闘いが多い。国は一旦決めた公共事業は絶対にやめない。したがって、それに対して反対運動が起こり、膠着状態がずっと続く。そういう意味では本州とは違う「光」と「影」が多くあった。しかし、国も道庁も住民も、「自立して持続可能な北海道をどう作るか」と、構図が大きく変わっていくのが2000年以降。
- ・10頁の下に北海道の開発予算がまとめられている。開発予算計上も1950年から今日まで続いているが、これは全体を一覧表のような形でどこかがまとめるのか。

### 【坂下部会長】

- ・事務局としてそういうことをすることにはなっていない。

### 【小田委員】

- ・開発予算の推移をどうしたらよいか、後で検討してほしい。
- ・この予算は小泉構造改革以降、国から地方におろされる金が極端に減る。北海道の開発事業費もそうだが、特に2000年以降は地方交付税交付金が毎年10%カットされて、道庁に入ってくる分が、小泉首相の期間でいえば1,590億円減っている。国庫支出金も3,000億円減っている。増えているのはそれをカバーするための借金である地方債。少なくなった金の使い途としては、一番打撃を受けているのが土木費で、入ってくるお金が少なくなったのでこれを最初にカットした。次にパーセンテージが一番大きいのが農林水産業で、5,000億円が半分になった。
- ・その結果、地域経済が厳しい状況におかれていく。これまでは国の公共事業で北海道経済が成り立っていたのだが、自分達で何とかしなければならぬという意識が強くなってくる。それまでも存在したが、この2000年以降から強くなり、ここから国に依存する意識が薄れてきた。

国の計画をそのまま受け入れることがなくなったので、かつてのような北海道全体で何かに反対するような事は、地域経済に限っては少なくなった。そういった意味では、2000年以降の意識の切り替えも、新しい道史に入れるべきと思っている。

**【坂下部会長】**

- ・今日は1970年以降だったのだが、それ以前の時代は、国の予算で環境問題をあまり考えずに積極的に工事をやって植民地的に投資が進んだ時代。その後矛盾が生まれ、成長も止まり、住民意識も高まっていくという大転換があったというのが今日のお話。
- ・2000年以降の話になると、どこまで触れるのかというのが微妙なところだが、昨日の企画編集部会において、資料編としては高橋知事になる前の2003年で一応区切る、通史編の部分は、それに関わる部分は前後について触れていただくこともある、という整理になったのでお知らせしておく。

**【韓委員】**

- ・「光」と「影」というのを勘違いしていた。「影」の部分は単純に事業が失敗したことを言っているとイメージしていたがそういうのではなく、「光」の部分のイメージも違っていた。お話を伺うことで理解できた。

**【坂下部会長】**

- ・土木事業というのは、産業分野的というと誰が担当することになるのか。

**【奥田委員】**

- ・小田先生のところと期待していた。
- ・『新北海道史』と今回との違う点は、今回は3部会に分かれているところ。前回は1部会だった。今回は政治・行政が第一部会、第二部会が産業・経済、そして第三部会が社会・教育・文化。そこでは、政治・行政部会との調整の問題が多分出てくると思うし、労働の部分など他の分野でも3部会との調整は常に出てくるものと思われる。一番調整の問題が出てくるのが、開発計画に関わる部分で、私の担当分野とも関わってくるのではないかと。先程話されていた開発局や開発局、道庁の関係性の問題も行政の問題になってくるので、おそらく政治・行政部会の方でもある程度扱うのではないかと考えている。
- ・そうなってくると、開発予算や財政についてはどうするのか。財政学というのは、一般的には経済学部にも置かれるものだが、どこで扱うのか。政治・行政の方でみるのかという問題。おそらく調整の課題というのは、最終的にまとめる段階では出てくるのかなと感じた。小田先生は『新北海道史』の第四章を中心に報告していただいたが、第四章のかなりの部分は政治・行政部会とだぶることになるのかと思う。
- ・第五章第一節のインフラ整備に関わる部分、河川が加わり、道路・港湾など交通の部分とも関わってくるので、小田先生に目配りいただくとありがたいという印象を持ったが、この部分で小田先生に何かお考えがあればお聞かせいただきたい。

**【小田委員】**

- ・第五章第一節は気に留めていなかった。北海道開発局が具体的に事業を進めているので、当然開発予算とも関わってくる。その事業も北海道にとって大事なものが多くあるが、それを扱うところがない。道財政の問題も各担当の分野を見てもどこにもない。開発に関わる形で、大きな事業については書かざるを得ないかなと思った。市川先生の交通基盤のところでも扱ってもらえるかもしれないが、交通以外にも河川や農水などもある。

【坂下部長】

- ・農水でも多目的ダムなどは農業予算とはいえ、中身的には土木予算なので、そういうものをどう扱うべきか。

【小田委員】

- ・そのうち調整しましょう。

【奥田委員】

- ・第一部会、行政との関わり。第一部会は事実上、今現在は担当者がお一人しかいないので、中身は私の方も把握していないが、そのあたりのことでお考えはありますか。

【小田委員】

- ・どのあたり（範囲）が行政になるのか。北海道開発庁・北海道開発局の設立経過については、当然、行政分野で触れるべきだと思うが。

【坂下部長】

- ・今外国に行っている前田准教授が、田中道政について雑誌に書いている。山崎先生は前の知事等からヒアリングを行っていると聞いた。政治・行政とは、財政の方とか事業との関わりで出てくると思う。
- ・そのほか、住民運動もあり、最初から線引きすると仕事にならない部分もある。気に留めながらも進めておき、今回お話しいただいたものを論文にするなどしてまとめておいてほしい。お互い何をしているのか、始まったばかりなので全く分からない。最初に規制するとやりづらいので、気に留めながらもまずは自分の枠組みの中で進めていただき、その後で調整することで進めてみてはどうか。

【事務局】

- ・山崎先生の聞き取りに全て同行している。元知事本人にも聞き取りを行っているが、その前段として戦略プロジェクトに参加したメンバーや、新長計や食の祭典に関係のある部署の人たちにも会ってお話を聞いている。その中で、先程の汚職の件なども聞いておられ、関心の中心は先ほど小田先生がお話したところと、かなり重複する印象。

【坂下部長】

- ・資料編をつくるのにかなり基礎的なデータを収集することになるので、資料の部分ではさほど重ならないような気がするが。

【事務局】

- ・通史編は三部会が一緒になって上・下巻を書くので、そこは分担しやすい。読む人にとっても北海道開発が出てくる箇所がわかりやすいと思う。
- ・しかし、資料編の場合、各巻のあちこちに北海道開発が出てくるのは避けたい。北海道開発のどの部分が政治・行政の巻に出てきて、どの部分が第2巻・3巻に出てくるのか、読者にもわかりやすい形でなければならないと思う。

【奥田委員】

- ・小田先生の一貫した道史に対する見識があるので、流れとしては重要。それを皆で共有してもらいたい。ただ具体的な資料の載せ方や収集の仕方は。政治・行政部会の山崎先生といつかの時点で意見交換をする機会を設けてみてはいかがか。お互いに理解すれば、あとの調整もしやすくなると思う。

【坂下部長】

- ・社会・文化小部会の委員にも入ってもらい、住民運動の部分も一緒に行ってはどうか。

【事務局】

- ・住民運動は角先生がやっており、いろいろな団体を調査されている。

【奥田委員】

- ・角先生も、科学者会議を訪問して千歳川放水路問題の声明を探するなどしているようなので、自主規制をするという意味ではなく、お互いの考え方を相互に理解する機会があってもよいかもしれない。

【坂下部長】

- ・時のアセスメントは政治・行政のカテゴリになるのか。

【事務局】

- ・政治・行政だと思う。

【坂下部長】

- ・道路の問題や千歳川などは農業にも関わる話。結局、北村は全て遊水池にする計画になるなど、全てが開発政策に関わりながら、産業的にも動いていくということになっている。

【小田委員】

- ・かつて「千歳川放水路」問題に関連して遊水池計画を提案したことがあるが、本州に前例があり、建設省所管事業で岩手県の一関遊水池が有名。普段は水田だが、大水が出た時だけ広大な地域に水を導入するというもの。しかし、堤防の整備などに時間を要するため、20年経過した一関も未だに完成していない。そのようなところの話も、どこで扱うのか。

【奥田委員】

- ・基本は全部載せていいけれども、問題は資料を載せる場所。遊水池問題が2つに分散するのは避けるべきで、どちらか一方に載せることになる。

【小田委員】

- ・それでは、とにかく載せる資料を集めて明らかにすることが先になるか。

【坂下部長】

- ・まずは資料を大量に集めてもらい、そこからセレクトする。ビラの類いは散逸してしまうので、早々に収集しておく必要がある。その後で、セレクト時に他と被らないようにとか、掲載順などの話になると思うが、さほど重複するとは思われないが。

【小田委員】

- ・最初は重複を気にせずに集めるしかないのではないかと。

【坂下部長】

- ・横路道政や、田中道政の方もやっているが、それらは総論の方で扱うべきか。みんな書きたいところだから。

【小田委員】

- ・一村一品運動などもあったが、これはどこで扱うのか。

【奥田委員】

- ・取り上げるならば、私のところで扱うことになると思う。

【事務局】

- ・山崎先生も、一村一品運動は注目されてインタビューされていた。

【小田委員】

- ・あの当時の一村一品運動は明らかに失敗で、北海道には合わなかったと思う。当時の北海道では価格維持政策で大規模にやるというのが、一番の収入だった。大分県の小さな町村とは性格

が違う。

**【坂下部長】**

- ・奥田先生がどういうことをやるのかも、早めに紹介してもらった方がよい気がする。小田委員からの報告に係る意見や質疑は以上にしたい。

**(2) 今後の予定**

**【坂下部長】**

- ・次回の予定だが、報告者については後日相談させていただく。
- ・先ほど話が出た紀要の件だが、今後、親委員会に諮って決まることになる。電子ジャーナルのような形で、一般的な紀要、論文、資料紹介のほか、編集の進み具合などトピックのようなものも含みホームページ上で公開することを予定。
- ・行政との関わりもあるが、皆さんによいものを書いていただければ、注目されて引用に至ることにもなると思われるので、学術論文的なものの作成について考えておいてほしい。また、タイトルも考えてみてほしい。
- ・刊行が一番早いこの部会が、頑張って投稿しなければならないので、ご協力願いたい。

**(3) その他**

**【事務局】**

- ・以前からお話していた道新記事の見出しのデータについて、昭和20年1月1日から昭和42年の3月31日までの分をまとめ、CDに焼いたので、皆さんに配付する。今回対象とした期間は、道新縮刷版が刊行される前日までの新聞記事の分で、昭和の63年7月以降は、ネット上で電子検索できるようになっている。今回は、電子検索できない時期の新聞を今回の第1期と縮刷版のある第2期に分け、今回はその第1期分を提供するので、参考にさせていただきたい。
- ・見出しは全部で4万4千件。時間がない中、事務局の判断で作業したため、分類の相違や入力ミスがあるかもしれないが、ご容赦いただきたい。
- ・検索方法は、CDに操作マニュアルを収録しているので、参照していただき、上手くいかないようであれば、随時ご連絡いただければと思う。
- ・新聞記事を見たい場合は、一番左端の番号とメールや郵送など提供方法を事務局にお知らせいただければ、その都度提供させていただくので、ご活用いただければと思う。

**3 閉会**

(了)